

ポスター2

ポスター発表(実践)

スタート期にどのような支援が行われているのか
—大学と地域の中学校との取り組みにおける「B君ノート」の分析—

奥野由紀子・孟盈・名塚公輔・
曹誉・郭莎・趙鑫・魏鈺・朱夏蓮
(首都大学東京)
※川原薫乃(共同実践者)

1 実践の場の特徴と目標

本発表は、今年5月から始まったA大学の日本語教育学教室による、中国出身の中学生Bへの支援について、毎回の支援の記録(以下、「B君ノート」)や支援者同士のSNSでのやりとり等を分析し、支援のスタート期にどのような支援が行われているのかを具体的に明らかにするものである。「B君ノート」には実際の支援の内容ややり取りなどの事実と、そのときに支援者が感じたことや考えたことが分けて記された。

実践者は、A大学の教員C、A大学の学生9名(中国語を母語とする留学生7名、日本語母語話者2名)である。中学校との連絡はCが行い、担任Dが時間割やBの希望を考慮した上で、授業に入り込んで授業の補助や通訳を行うか、取り出して日本語を教えるかを依頼している。Bは5月に来日し、実際の年齢よりも一年下の学年に在籍している。教員Cが日本語が全くわからないCの存在を個人的に知り、D中学校へ申し出たことから支援が始まった。実践の目標はBやD中学校とのラポールを築きながら学習支援、日本語支援を行うことである。また、Bの学友達の異文化理解の促進補助も視野にいれている。

2 実践の内容(結果)と考察及び今後の課題

「B君ノート」やSNS等のやりとりを分析した結果、支援学生は日本語支援の他に、ノートの取り方や電子辞書の使い方等の学習スキルのアドバイス、テストやプールが辛いBの気持ちを担任に伝える、中国にはない中学校の習慣をBに説明する、先生とのコミュニケーションの取り方についてのアドバイスする、SNSを用いて励ます等を行っていることが明らかとなった。また、Cは支援学生が直接担任には言いにくいことを伝えたり、合唱コンクールに向けて担任と支援学生に連絡し、歌詞を母語で訳してBに伝えるよう指示するなどの間接的な支援を行っていることがわかった。これらの支援を通してスタート期に重要なラポールをBや中学校と支援側間で形成できたと考えられる。今後は、Bの日本語の習得状況、心境の変化などに留意しながら、どのような支援が可能か、他の生徒や教員への理解をどのように深めていけばよいかについて考え、支援を継続する必要がある。